

夜叉神のたたり

昔、御勅使川の源には、夜叉神という悪い神が住んでいたと言ひ伝えられています。そして、その夜叉神という神は、体がとても大きく、そのくせ身軽で、山でも、谷でも自由にとび歩き、暴れ回り、村人を苦しめ、村人からは「夜叉神のたたり」と恐れられていたのです。

ある年のことです。ものすごい大雨が三日も降り続き、三日目の夜にはどつりと立っていた芦倉山が半分近く崩れ落ち、川の流れをびったりと止めてしまったのです。このようすを見ていた夜叉神は、ますます狂ったようになって、稲妻を飛ばし、雷をならし、大雨を降らせたので、村の谷は二夜のうちに、二面、湖のようになってしまいました。なおも降り続く雨に、その水面はじわじわ上がり、今にもあふれ出ようとしていました。そうになると、水の流れをせき止めている柔らかい地盤は、みるみる崩れ始めて、まもなく、津波のような大水となって、どつと流れ始めました。

荒れ狂う濁流は、山を削り、大木を根こそぎにし、岩を転がし、ものすごい音で谷を揺るがしながら、流れ下つていきま

した。こうして、たちまち、谷から里へとほとばしり出た濁流は、釜無川の土手を突き

崩し、甲府盆地へ広がり、やがて、笛吹川をも飲み込んで、遠く二宮のあたりまで寄せていったのです。このため、今度は、甲府盆地が二面の湖のようになってしまいました。この水の流れに追われた人々の、あちこちの高台で深く嘆くその声は、天地をおおったということです。

時の甲斐の国の国司(知事)は、そのむごたらしいようすや、人々の苦しみを見て、助けを朝廷に求めたので、時の天皇はとても心配して、勅使(天皇のお使い)を何回か出して、そのようすを調べるとともに、水がはやく引き、二度とこんなことがないように、水難の防除を神に祈られたのです。これは、今なお行われている、二宮の浅間神社の御神幸祭の起りとも言われています。



瀬戸の滝



夜叉神の祠

一方、村人も、「夜叉神のたたり」を恐れ、夜叉神を慰めるために、この御勅使川を見下ろせる峠、今の夜叉神峠に、石の祠を建て、手厚くまつり、みんなでお祈りをしたので、こうした村人の心が通じたせいでしょうか。その後は、「夜叉神のたたり」も少なくなり、だんだん平和な村になってきました。そして、今では、かえって、「夜叉神」は、山を守る平和な神として、人々に親しまれています。また、湖が崩れ落ちた落ち口は、「瀬戸の滝」と呼ばれ、かなり高く、滝のようになっていますが、今ではきれいな冷たい水を、静かに落とし続けています。

「御勅使川」の名前の由来は、この伝説で語られる洪水のほか二回の大洪水が平安時代の天長年間に起こり、三度天皇の勅使が下向したため「御勅使川」あるいは「三勅使川」と呼ばれるようになったとの伝承があります。また江戸時代の文献には水出川の意味で「みてい川」と書かれています。

どの説にしても名前の由来は洪水と結び付けられ、御勅使川が古くから洪水を繰り返す川であったことを示しています。祖先の人々が暴れ川に苦しめられてきたがゆえに治水技術が発達し、大正時代には日本で初めてコンクリート製の芦安堰堤が造られるなど先端技術が導入され、現在御勅使川の洪水はほとんどなくなりました。しかし「夜叉神のたたり」は、御勅使川のかつての記憶とともに現在の水害への備えを私達に語りかけているようです。



芦安堰堤